

ドラッグストアにおける禁煙支援者育成の試み

イソムラ タケシ ムラチ タカナオ
磯村 毅*1 村手 孝直*2

目的 平成13年9月にニコチンガムがOTC (Over-the-Counter) 販売となるなど、薬局、ドラッグストアにおける禁煙支援者の育成が急務となっている。ドラッグストアにおける効果的な禁煙支援者育成の方法を検討した。

方法 ドラッグストアチェーンであるスギ薬局の新入社員97人に対し、講義形式60分、ロールプレイ20分による禁煙支援者育成セミナーを行った後、アンケートを実施した。

結果 過去に禁煙を勧めたことがある人は22%であったが、セミナー終了後に、今後、勧めると答えた人は78%に増加した。禁煙支援の能力について、やろうと思えばできた、だいたいできた、と答えた人は33%であったが、セミナー後は、できる、だいたいできると答えた人は78%に増加した。

喫煙者而非喫煙者（過去の喫煙者含む）で比較すると、今までに禁煙を勧めた人の割合は、それぞれ順に20%、23%と低かった。セミナー後、勧めると答えた人は、両群ともに増加したが、喫煙者での57%と比べ、非喫煙者では85%となり有意に大きくなった ($p=0.0052$)。

タバコ関連疾患について8問全部正解だった人は喫煙者の50%に比べ、非喫煙者では73%と多かった ($p=0.028$)。タバコを吸う動機について、喫煙者では「気持ちが悪くなる」と答えたものが22%であったが、非喫煙者では56%と多かった ($p=0.0029$)。上記のような違いは男女、出身学部によっては見いだされなかった。

結論 新入社員に対する禁煙支援セミナーの後、禁煙を勧めると答えた人が増加した。非喫煙者に対し働きかけると、より効率よく禁煙支援者を得ることができる。喫煙者の場合、セミナーの直後でも、タバコの害を少なく見積もる傾向がある。非喫煙者では喫煙の理由について、実際の喫煙者と違うことを思い浮かべる場合が少なからずあり、両者の意思疎通の妨げになる。こうした違いは、性別、出身学部によっては認められず、タバコに対する態度は、喫煙者かどうかが決定的である。

キーワード 禁煙支援、ドラッグストア、OTC (Over-The-Counter)

I はじめに

2000年に米国公衆衛生局により更新されたガイドラインでは、短時間であっても、医療側の日常診療レベルで繰り返し行われる禁煙治療が効果的であることを示唆し、ニコチン製剤の使

用を推奨している¹⁾。わが国でも、平成13年9月に、ニコチンガムがOTC (Over-the-Counter) 販売となるなど、特に、薬局、ドラッグストアにおける禁煙支援者の育成が急務となっている。今回、ドラッグストアチェーンであるスギ薬局の新入社員研修において、禁煙支援者育成セミナーを行う機会を得た。セミナー終了後、効果的な禁煙支援者育成の方法を検討するためアン

*1 名鉄病院呼吸器科医長 *2 同部長

表1 学部・性別喫煙率

(単位 人、()内%)

	総 数	薬学部	その他の学部
総 数	23/97 (24)	6/38 (16)	17/59 (29)
男 性	19/47 (40)	5/17 (29)	14/30 (47)
女 性	4/50 (8)	1/21 (5)	3/29 (10)

注 喫煙率(%)=喫煙者数/人数

表3 禁煙を勧めた、勧めると答えた人の回答者に占める割合
(単位 %、()内人)

	セミナー前	セミナー後
総 数	22 (18/82)	78 (75/96)
喫 煙 者	20 (4/20)	57 (13/23)
非喫煙者	23 (14/62)	*85 (62/73)

注 *p=0.0052

表5 喫煙別にみた全問正解者の割合

(単位 人、()内%)

	総 数	7点以下	8点(満点)
喫 煙 者	22 (100)	11 (50)	11 (50)
非喫煙者	74 (100)	20 (27)	*54 (73)

注 *p=0.028

ケートを実施し、解析した。

Ⅱ 方 法

対象者は、スギ薬局(株)に平成14年4月に新規採用された新入社員全員とした。禁煙支援者育成セミナー(講義形式60分、ロールプレイ20分)を行った後、アンケートを実施した。アンケートは無記名で、記入後ただちに回収した。

調査票(付録)は、全対象者に同じものを用いた。タバコ関連疾患に関する質問は(正解はすべて「関連あり」の○である)、セミナー中に説明した内容で、全問正解が期待されるものであった。

Ⅲ 結 果

(1) 対象者の全体像とセミナーの効果

対象者は薬学部出身者38人、その他の学部出身者59人の合計97人、平均年齢は22.1歳であった。男性は47人、女性は50人であった。喫煙率は全体で24%(23/97)、薬学部出身者16%(6/

表2 タバコ関連疾患の理解度

	正解した人数	正解率(%)
肺 が ん	96	99.0
不 妊 症	92	94.8
気 管 支 喘 息	90	92.8
心 筋 梗 塞	90	92.8
動 脈 硬 化	88	90.7
歯 周 病	82	84.5
アトピー性皮膚炎	80	82.5
糖 尿 病 合 併 症	78	80.4

表4 禁煙支援が(だいたい)できた、(だいたい)できると答えた人の回答者に占める割合

(単位 %、()内人)

	セミナー前	セミナー後
総 数	33 (29/87)	78 (69/89)
喫 煙 者	45 (10/22)	70 (16/23)
非喫煙者	29 (19/65)	80 (53/66)

表6 喫煙の動機に関する回数

(単位 人、()内%)

	総 数	気持ちが休まる	手持ちぶきた	気分転換	習 慣
喫 煙 者	23(100)	5(22)	5(22)	8(35)	5(22)
非喫煙者	73(100)	*41(56)	14(19)	8(11)	10(14)

注 *p=0.0029

38)、その他の学部出身者29%(17/59)で、薬学部出身者に少ない傾向にあったが有意差はなかった(表1)。

タバコ関連疾患に関する質問の正解率は、肺がんの99%(96/97)が最高で、糖尿病合併症が80%(78/97)で最低であった(表2)。

過去に禁煙を勧めたことがある人は22%(18/82)であったが、セミナー終了後に、今後、勧めると答えた人は78%(75/96)へ増加した。禁煙支援の能力については、できた、だいたいできた、と答えた人は33%(29/87)であったが、セミナー後には、できる、だいたいできる、と答えた人は78%(69/89)に増加した(表3、4)。

(2) 喫煙者と非喫煙者(過去の喫煙者を含む)での比較

タバコ関連疾患について8問全部正解だった人は、喫煙者で50%(11/22)、非喫煙者で73%(54/74)と非喫煙者に多かった(p=0.028)(表5)。喫煙者と非喫煙者で比較して、今までに禁

煙を勧めた人の割合は、喫煙者20% (4/20)、非喫煙者23% (14/62) であり、同程度であった。セミナー後、いずれの群でも禁煙を勧める人が増え、喫煙者で57% (13/23)、非喫煙者で85% (62/73) となったが、その割合は非喫煙群において有意に大きくなった ($p=0.0052$) (表3)。禁煙指導の能力については、セミナー前にできた、だいたいできた、と答えた人は、喫煙者で45% (10/22)、非喫煙者で29% (19/65) であった。セミナー後はそれぞれの群で、70% (16/23) と80% (53/66) へと増加したが、その割合は両者間で差を認めなかった (表4)。

タバコを吸う動機について、喫煙者では「気持ちが悪くなる」と答えたものが22% (5/23) であったが、非喫煙者では56% (41/73) で多かった ($p=0.0029$) (表6)。これらの項目(タバコ関連疾患の理解度、禁煙を勧めたか、今後勧めるか、禁煙指導の能力、喫煙の動機についての考え)について、男女、出身学部による違いは見いだされなかった。

IV 考 察

今回の調査の特徴は、これから実際にドラッグストアの店頭に立って、禁煙支援を担っていく新入社員に対してなされた、セミナーの効果性を調べたことにある。セミナー終了後に、禁煙を勧めると答えた人は22%から78%に増加した。これはがん(成人病)専門医療施設に勤務する看護婦での割合72%と同水準であり²⁾、ある程度の目標は達せられたと考えられる。

平成12年国民栄養調査結果の概要³⁾によれば、20歳代男性の喫煙率は60.8%、同女性では20.9%であった。対象者の喫煙率は低い、おそらくドラッグストアに就職を希望する人たちであるだけに、健康への関心が高いのであろう。

しかしながら、過去に禁煙を勧めたことがあったと答えた人は、喫煙、非喫煙のいずれの群でも2割程度と少なかった。セミナー後には、禁煙を勧めると答えた人が、喫煙、非喫煙を問わず、大幅に増加した。これは1つには、自ら周りに禁煙を勧めるほどには、タバコの害の深刻

タバコに関する意識調査

- あなたの年齢と性別、出身学部をお答え下さい。
歳 () 男性、() 女性 出身学部 _____
- タバコと関連があると思う病気に○印、関連がないと思う病気に×印をつけてください。(いくつでも可)
() 肺がん () 心筋梗塞 () 気管支喘息 () 歯周病
() 糖尿病合併症 () 動脈硬化 () 不妊症
() アトピー性皮膚炎
- お客様に禁煙を勧めたことがありますか?
() 機会があれば勧めていた
() 機会があっても、あまり勧めたことはない
() 勧めたことはない

今後はいかがですか?
() 機会があれば勧めるだろう
() 機会があっても、あまり勧めないだろう
() 勧めないだろう
- あなたの禁煙指導の能力についておたずねします。
今まででも、やろうと思えばできましたか?
() できた
() だいたいできた
() できなかった

今後はやろうと思えますか?
() できると思う
() だいたいできると思う
() できないと思う
- あなたはタバコを吸いますか?
() 現在も吸っている
() 過去に吸っていたがやめた
() 吸ったことはない
- (喫煙者・元喫煙者へ) あなたは、どんな動機でタバコを吸いますか? 吸いましたか?
(非喫煙者へ) タバコを吸う人はどんな動機で吸うと思いますか?
最も当てはまるものを1つだけ選んでください。
() 気持ちが休まる () 手持ちぶさた
() 気分転換になる () 何となく習慣

さを正確にとらえていなかったためと考えられる。セミナー後に、禁煙を勧めると答えた人の割合は、喫煙者では57%となったのに対し、非喫煙者では4倍以上の85%となった。非喫煙者に対し働きかけると、効率よく禁煙支援者を得ることができる。

禁煙指導をする能力を自己評価してもらったところ、喫煙者、非喫煙者のいずれでもセミナーの前後で、できると答えた割合が増加したが、両群間に偏りはなかった。しかしながら、喫煙者では、その半数が、セミナー直後で全問正解が期待される問題に対して、タバコの害を少なく見積もる、誤った回答をしており、非喫煙者より正解率が低かった。

心理的に矛盾を抱える喫煙医師に比べ、喫煙

していない医師は、禁煙支援に熱心であることが知られている⁴⁾⁵⁾。この観点からみると、セミナー前に禁煙を勧めたことがあると答えた割合が、非喫煙者においても喫煙者と同等に低かったことは、新入社員全体として、職業倫理への自覚が未熟であった可能性を示唆する。こうした要因も、禁煙を勧めると答えた人の劇的な増加の背景と考えられ、新入社員への研修の重要性を示唆するものであろう。

禁煙支援者育成には、2つの側面、すなわち禁煙支援をするようにすべての職員に促すという側面と、喫煙している職員が禁煙するのを促すという側面がある。いずれも重要であることは論をまたないが、介入による禁煙成功率は低い⁶⁾こと、禁煙支援者育成の目的は、単に反喫煙なのであり、反喫煙者であるかの印象を与えてはいけないことの2点から、短期に効率よく禁煙支援者を育成するためには、非喫煙者への働きかけが大切である。非喫煙者であっても、適切な研修を受けなければ、禁煙を勧める人は少数にとどまる恐れがあることも強調しておきたい。

今回、喫煙の動機について、非喫煙者が思い浮かべる理由が、喫煙者が感じるものと必ずしも一致しないことが明らかとなった。非喫煙者が禁煙支援を行う際に、意思疎通の妨げとなりうるため、禁煙支援者育成の際には注意が必要である。

謝辞

本研究は、「子供をタバコから守る会」による助成を受けて行ったものである。

文 献

- 1) The Tobacco Use and Dependence Clinical Practice Guideline Panel, Staff, and Consortium Representatives: A Clinical Practice Guideline for Treating Tobacco Use and Dependence. JAMA 2000; 283(24): 3244-54.
- 2) 田中英夫, 木下洋子, 蓮尾聖子, 他. がん(成人病)専門医療施設に勤務する看護婦の禁煙指導の現況. 厚生指標 2001; 48(11): 22-7.
- 3) 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室栄養調査係. 平成12年国民栄養調査結果の概要. 厚生指標 2002; 49(4): 38-47.
- 4) 森敦亨. 医療従事者の喫煙. 日本公衛誌 1993, 40: 71-3.
- 5) 皆川典栄. 禁煙教育における学校医の意識. 学校保健研究 1986, 28(11): 538-45.
- 6) Fowler G. In Bollijer CT, Fagerström K, et al. The tobacco epidemic. Prog Respir Res 1997; 28: 167.